

# 抽象風景歩くふたり

文人の  
武蔵野

村上春樹の長篇小説「ノルウェイの森」の「僕」は、幼馴染の直子と再会し、四谷から駒込へ歩き、駒込から新宿へと、皇居に接する都の北西部に円を描くように「東京の町」を移動します。「僕」は固有地名によって東京の地理を認識していますが、直子にとってはどこを歩いているのか把握することのできない

## 村上春樹 ②

「どこでもない場所」です。「僕」の住む男子学生寮のある地名は明記されていませんが、正面には「巨大なけやきの木がそびえ立って」います。直子の住むアパートは「国分寺」にあり、「武蔵野のはずれ」の女子大に通っています。近郊で武蔵野らしい雑木林や草原を歩くことは可能でしたが、ふたりが会うのは、風景としての記憶が残らない「東京の町」でした。

日曜日になると、「僕」と会うために彼女は「中央線」に乗ってやってきます。「坂

直子が住んでいた「国分寺」にある国分寺駅。中央線が走っている



を上り、川を渡り、線路を越え、どこまでも歩きつづけた。どこに行きたいという目的など何もなく。ただ歩けばよかったのだ。まるで魂を癒すための宗教儀式みたいに、我々はわきめもふらず歩いた」とあるように、「東京の町」をあてもなく歩き続けるのでした。

直子は、20歳を迎えた日に「僕」と肉体的に結ばれ、傷つき、その日を最後に「武蔵野のはずれ」から西方の「京都の山の中」の奥に移動します。「僕」は、彼女を追うように西に移動し、吉祥寺へ転居します。直子を追って「京都の山の中」を訪れた「僕」は、以前のように直子と歩きますが、「僕」は草原を抜け、雑木林を抜け、また草原を抜けた」とあります。

ふたりが歩いたのは固有地名によって跡づけられるような具体的な空間ではなく、「草原」と「雑木林」の風景でした。いわば抽象化された「武蔵野の風景」の中で、「僕」は直子の記憶の核心、心の傷

に触れます。今度こそ心身ともに直子と結ばれることを待ち望みます。

「僕」は吉祥寺に帰り直子を待ちますが、実際に「武蔵野の風景」を見たのは直子ではなく、彼女の死を知らせてくれたレイコさんでした。

「僕」と直子は、武蔵野を巡ってすれ違い、現実の武蔵野で「武蔵野の風景」を見るこ

とができずに終わります。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

\*

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

